

佳作

お父さんありがとう

三月十一日午後十四時四十六分、ぼくは、ちょうど学校で帰りの支度をしていました。突然教室がカタカタとゆれ出し、「あつ地震だ」

と誰かが叫びました。ぼくはすぐおさまるだろうと思った矢先、今までに経験した事もない大きなゆれで立っている事さえこんなになりました。その時先生が、

「落ち着いて、これから校庭に避難します。」と言ったので、頭を守りながら校庭に避難しました。ほっとしたとたん、さつきよりさらに大きな地震がおそいました。校舎自体揺れ出し、怖くて泣き出す子も大勢いました。その後、班長のおじさんが車で迎えに来てくれたので一緒に乗せてもらって家まで帰ってきました。外は、朝見た風景とは全く違っていました。家に着いてさらに地震の怖さを知る事に。弟は家を見て泣いてしまいました。その時お父さんが心配して会社から戻って来てくれました。ぼく達にかけよってきて、「大丈夫か？ けがないか？」

と言つてギョッと抱きしめてくれたので、すごく安心しました。すぐ後にお母さんも会社から帰ってきて、泣いている弟をなだめて家の中の様子を見に行きました。その時電気も水も止まっている事に初めて気付きました。

この一大事に、お父さんの趣味がわが家を救ったのです。その日からキャンプ生活の始まりです。ご飯はお父さんがハン

山形県

鶴岡市立朝陽第六小学校 五年

大槻 優斗

ゴウで炊き、ゆいいつガスは使えたので、冷蔵庫の中の傷みそうな物から順番にお母さんがおかずを作ってくれました。暗くなつたらお父さんがランタンを焚いて部屋を明るくしてくれて、夜は冷えるので服を何枚も重ね着し背中にもホッカイ口をはり、湯たんぽを抱いて寝ました。しかし、折角寝付いても余震の度に何度も起きるので毎日寝不足でした。

学校もお父さんの仕事も休みになり日中は落ちた瓦の片付けや水くみのお手伝いをしました。情報はラジオのみで、津波で多くの犠牲者が出た事や原発事故についても何日か後に知りました。その後、風に流され高い放射能が上空に迫っている事を知り、ぼく達を守るため、お父さんの決断ですぐ山形に避難しました。避難して二週間後に学校が始まると連絡がきたので一旦は福島に戻りましたが、原発問題が解決しないので、お父さんから、「安心して住めるまで、山形に行つて思いっきり遊んで来い。」と言つて引越しを決めてくれました。

本当は、お父さんと離れて暮らすことや、仲の良い友達と離れるのは嫌だったけど、こっちに來たら友達も沢山出來て、外で思いっ切り遊べるようになったよ。週末の度に会いに来てくれてぼく達はずごくうれしけれど、無理しないでね。どんな時もぼく達を一番に守ってくれるお父さん本当にありがとう。